

のこの土地を支えた水路だったのかと思うと、感慨深かった。

その後、関屋宿を経て、宿舎に戻った。関屋宿は、かつての宿場町で、古い家並がその面影を残し、落着いたたたずまいを見せていた。

3月9日、那須岳へ。平地では見られなかった雪が、ここにはあった。ケーブルは、まだ操業をしていなかったため、頂上まで行くことができず、非常に残念だった。しかし、まだ足跡のついていない雪を、ふみしめて歩くのは、何て気持のよいことか。風紋のついた雪が、目に焼きついている。

3日間の日程を終え、午後、朔風の北関東をあとにした。 (3年 山本和子)

紀伊半島巡検 (齊藤先生)

3月6～8日

今回の巡検は地元での聞き取り調査が主な目的であった為、下調べのないまま参加したが、質問の上での不便を除けばかえって先入観のない新鮮な解答を得ることができて、その点では意義があったかと思う。

3月6日 東京を8時の新幹線で立っても紀伊半島の今夜の宿泊地白浜へは17時22分着と約9時間30分もかかり、陸の孤島ということが実感として感じられた。このような訳で第1日目は車窓景観の観察のみに止まった。名古屋から松阪までは伊勢平野に広がる水田と工業地帯であったが、松阪から太平洋岸の長島へは降水量の多いことで有名な大台ヶ原を水源にもつ宮川の開析谷に沿って谷壁の杉林を見ながら紀伊山地東端を横断した。長島から串本まではリアス式の海岸線が続き、湾奥の狭い平地に沿って鉄道が走っている為、照葉樹と半農半漁らしい寒村が幾つもの小さなトンネルの合間に見え隠れした。串本から白浜にかけてはこの照葉樹に加え羊歯類が多くなり、小雨模様の天候にもかかわらず暖地域という感が一層強くなってきた。

3月7日 午前には御坊市役所で企画室長の概観説明の後、教グループに分かれ各課へ出向いて調査を行った。その結果御坊市の主産業は農業で、中でも山地の夏みかん(最近では需要の関係で甘夏に切り替えている)低地のえんどう・すいか等の畑作物(冬でも霜が降りないため露地栽培)が特徴的な産物で、最近低地では水田から畑への転換が盛んに行われているということ、また以前は林業が盛んで河口の日高港は材木がいかだで運ばれ、付近の製材工場は活気を呈していたが、現在は

資産家が遠くに山を持っている程度で、その材木も直接トラックで大阪へ運搬される為、日高港の製材工場は外材に頼っているということ等がわかった。午後はアメリカ村で有名な美浜町三尾地区へ行き2～3人づつに別れ戸別訪問による地域調査を行った。その結果この村の移住地はカナダが多く、その原因として地形が狭少な上、港の整備も悪く、農業でも漁業(2t程度の小型船で漁獲物はあわび・さざえ・いせえび等)でも生計が立たないこと等があげられた。現在では367戸のうち300戸がカナダ・アメリカの移民と関係があり、37戸が空家となっているということがわかった。また三尾地区の多くの家は高いへいに囲まれ、本瓦の屋根は漆くいが塗られ、長く張り出された軒の先端と地面の間は地面から1.5mあたりまで「さし板」というものが横に張り渡され雨風が直接雨戸に当たらないようになっている。その為家の中はかなり暗かった。台風襲来地における特異な家屋景観であった。

3月8日 この日は調査を行わず、和歌山を通過して奈良の桜井に向い、正午に正井先生の奈良巡検に引き継がれた。(4年 松崎正子)

奈良・京都巡検 (正井先生)

3月8～10日

8日 八木西口駅より出発し、徒歩で今井町に向い。称念寺を中心とした寺内町で、幅3.5mの格子状道路網に天井の低い家々が密集している。防衛のために町にめぐらされていた堀は、現在ごくわずか残っているのみである。その後畝傍山に登る。標高199mで山というには低いが、大和三山の中では一番高く、奈良盆地を一望できる。ここから見ると、今井町は他の町の家並と違い、黒々とした日本瓦が重々しく密集しており、盆地全体としてかなり宅地化の進んでいることがわかる。

午後5時半に宿泊地である信貴山に到着。

9日 早朝は鶯の鳴き声をききながらの信貴山見学、それから大和郡山に向い。典型的な環濠集落として稗田の集落を見学する。堀はほぼ完全に残っており、家々は土壁に囲まれ、狭い道路が迷路のように走って、まるで中世の町並そのままを残しているかの様だ。

午後は天理市に向い。国鉄天理駅に近づくとつれて、車窓の景色に一種独特な大きな建物が目立ちはじめってくる。駅前には地方都市にしては大きすぎる広場があり、幅の広い道路が一直線に駅か